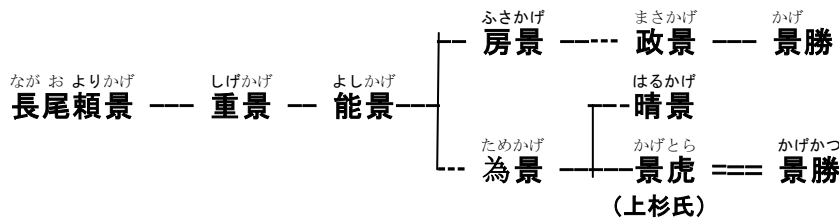


第9話 上杉謙信と武田信玄

ぎきょう と えち ご けんしん ち ぼう た か い しんげん
 義侠に富んだ越後の謙信と智謀に長けた甲斐の信玄とが、
 しばしば戦って、ついに川中島の戦い。 両人共に上京の志を抱きながら、
 あいさまた は
 互いに相妨げられて、ついにその志を果たさずに終わる。

なが お かげとら 長尾景虎

やまのうち け うえすぎのりまさ ほうじょうぢやす せ た こうづけ に えち ご なが お かげとら ころよ
 山内家の上杉憲政が北条氏康に攻め立てられて、上野から逃げて越後に来ると、長尾景虎は快く
 むか たの ひ う かげとら わかむしや いくど かつせん
 これを迎えて、その頼みを引き受けた。 この時、景虎は23才の若武者でしたが、すでに幾度か大きな合戦
 い ふ かげとら すなわ うえすぎけんしん はなばな えいゆうぶ
 をもして、威を北国に振るっていたのです。 この景虎が、即ち後の上杉謙信ですが、その華々しい英雄振
 かた ま お た
 りを語る前に、先づその生い立ちをお話します。
 ながおし へいし うえすぎし つか えち ご かげとら ためかげ
 長尾氏は、もとは平氏から出ました。 代々上杉氏に仕えて越後にいたが、景虎の父の為景の時に初め
 どりつ りょうしゅ
 て独立してその領主となりました。



かげとら ようじ 長尾景虎の幼時

かげとら ためかげ さるまつまる とらちよ すこぶ そうめい
 景虎は為景の次男で、幼名を猿松丸といい、又、虎千代ともいった。 生まれつき頗る聡明でしたが、
 同時にまた大胆で、手に負えない強情者でもあったので、父は、これを坊さんにしようと、7才の時に城下
 りんせんじ あま
 の林泉寺というお寺に入れました。 けれども、甘んじて坊さんなどになろうとは思わなかったのでしょう。
 さるまつまる ししょう おし したが さるまつまる ため
 猿松丸は一向に師匠の教えに従おうとしなかったもので、9才の時に林泉寺の和尚は、猿松丸のために父の
 かげ こ ごなら ためかげ えっちゅう
 景に請うて、城に帰らせた。 それから4年経った時です、後奈良天皇の天文12年に、父の為景は越中
 はるかげ つ
 で戦死して、兄の晴景が家を嗣いだ。

ところが、晴景は至って柔弱で、部下の者に侮られて、その国が大いに乱れたので、ついに自分でこれを鎮めることが出来なくなり、家督を弟に譲った。

そこで、猿松丸は元服して名を景虎と改めた。 天文12年のことで、彼が14才の時でした。 景虎は兄に代わって家を嗣ぐと、春日山城に拠って、忽ちの間にその乱れた領国を平らげた。 よほどの剛勇



上越市 春日山の城址

でもあり、又、戦術にも巧みであったのです。

長尾景虎の戦術

それに就いて1つの挿話が伝えられています。景虎が18才の時の事でした。従兄の政景が自分の勢いの盛んなのに心が驕って、景虎の領地を奪い取ろうと、兵を率いて攻めて来た。景虎の重臣で、彼の軍学の師でもあった宇佐美定行はこれを見ると、すぐに城を出て戦おうとした。すると、景虎はこれを止めて、そして定行を連れて櫓にのぼって敵軍の様子を眺めながら言った。「御覧、敵には輜重(訳注：軍需品)の用意が無い。思うに、長く城を囲むつもりは無いらしい。敵の退く時に乗じて撃つて出たほうがよい」と。定行は、折角、はるばると攻め寄せて来た敵であるので、容易には退くまいとは思ったが、主人の言うことであるので、ともかくもその命令に従って、敵の攻めるに任せて城を守っていた。するとその夜半になって、果たして、敵軍は退却を始めた。すると、景虎は、急に城門を開いて打って出て、浮き足立った敵軍を見事に打ち破ってその跡を追いかけた。

ところが、やがてある山路にさしかかると、不意に彼は足をとどめた。「眠くなった。ひと眠りして行こう」と、彼は言って、ついで路傍の民家に入ると、さも疲れたように、ぐったり横になった。定行は呆れた。今こそ破竹の勢いで攻め立てるべき時であるのに、なんということだと、彼は腹を立てながら気を揉んでいた。ところが、暫くすると、景虎は、がばと跳ね起きた。「敵軍はもはや峠を越えた筈だ。それ、者共進め！」と、彼は真っ先に馬に鞭打って、一目散に駆け上った。果たして、敵は峠を踰えていた。景虎はそれを見ながら攻め下りた。その猛烈な追撃に、さすがの政景もさんざんに打ち破られて、ついに降参した。

この時、政景は景虎より4つ上の22才でした。定行は59才で、文武両道の達人でもあり、殊に軍師としては最も老巧を聞こえていたのもあったのに、若年の景虎の計略を2度まで悟ることが出来なかったもので、自分には恥ぢ、景虎には感心して、その後はいよいよ全力を尽して景虎を輔けたということになります。

こうして、長尾景虎は先づ国内の乱を取鎮めると、兵を越中に進めて父の弔い合戦をした後、更に加賀、能登方面をも征服したり、海上遠く佐渡をも切り従えたりして、大いに北国に威を振るった。上杉氏を称す上杉憲政が景虎を頼って来たのは、ちょうどこの頃です。時は天文21年の正月で、彼が23才でしたことは前に述べました。彼は憲政から関東管領の職と共にその家名をも授けられると、憲政と父子の約束を結んで、ここに始めて上杉氏を称えた。



うえすぎけんしん
上杉謙信

名も政虎と改めたのは、その後7年ほどしてから京都にのぼって、時の将軍足利義輝に謁して、その名の1字を賜ってからです。この時に、彼は関東管領にも正式に補せられました。

さて、彼が上杉氏を称し上杉謙信と号してからは、管領家の勢力を元に復さんがために、しばしば兵を関東に出して北條氏と戦ったが、北條氏康がよく拒いだので、いつも勝敗はつかなかった。中でも殊に最も名高いのは、永禄4年3月の小田原攻めです。

里見義駿が援けを上杉謙信に請う

これより先、北條氏康が古河公方の晴氏を廃して、その末子の義氏を（自分の妹の生んだ子であるので）を立てて後を嗣がせた時に、義氏の異母兄の藤氏と藤政とは、去って安房の里見氏に頼ったが、このために、そうでなくとも互いに乗ずべき機会を狙っていた北條氏と里見氏とは、更に一層強く敵意を挟むようになって来た。こうして、永禄3年8月、氏康は例の黄八幡綱成らと共に、上総の久留里城に里見義駿を囲んで、どうしてもこれを陥れようとした。すると、義駿は、迎もこの勢力では北條氏に対抗できそうになかったのので、はるかに援けを越後の上杉謙信に請うた。

その折柄に、常陸の佐竹氏もまた北條氏のために圧迫されて、援けを謙信に求めていた。

それで、義侠に富んだ謙信は、1つは関東管領の威力を発揮するためでもあったろうが、すぐにこれらの依頼に応じて、上杉憲政を奉じて、兵8,700を率いて上野に入ると、先づ沼田城に黄八幡綱成の子の孫二郎を攻め落として、これを斬って、厩橋（今の前橋市）に入った。氏康は久留里城の囲みを解いて、軍を河越城に旋してこれを防ごうとしたが、謙信の勢いが盛んで、上野、武蔵の諸城は風を望んで彼に降ったので、北條氏康は河越をもまた退いた。

小田原に迫る

謙信はさながら無人の境を行くが如くに、武蔵から相模の諸城を攻め下して、ついに翌4月の3月13日に小田原に迫った。この時、彼の総勢は110,000にもものぼったといわれる。

ところが、氏康は、この勝ち誇った謙信と正面から戦うことの愚なのを早くから見て取ったので、部下の諸将に命じて、領内の兵をことごとく小田原城に引き上げさせていたが、今はますます防備を固くして、ただ城を守っていた。

北條氏康の先見

氏康は言った。「謙信は剽悍で、一時にどっと攻め立てることは得意だが、知慮に乏しいので、ちっと腰をおちつけて、永く囲んでなどいられまい。それに、威力を畏れて一時従っているようなものも多からう。しばらく相手にならず、勝手にさせておけば、そのうちに内訌が生ずるに違いない。其の時、敵が引き上げかけたところを撃てば、必ず身方の大勝利となる」と。

果たして結果はそうだった。謙信は1月余も嚴重に囲んでいたが、ついにこれを陥れることが出来ないうちに、一旦降参していた諸将が、しだいに彼に叛いて氏康に降ったので、大いに驚いて引き上げかけた。すると、小田原勢が所在に起こって、彼の輜重を奪ったりしたので、謙信はいよいよあわてて越後に帰りました。

その後も謙信はなお幾度か兵を出して、上野や武蔵で北條氏と戦ったが、しかし、要するにただその武勇

第9話 上杉謙信と武田信玄

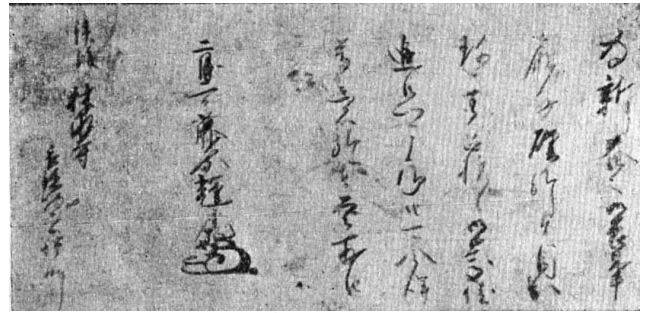
と義侠とを示しただけで、実際の上には殆ど何の勢力をもこの方面には得ることは出来なかった。

とはいえ、かれの義侠と武勇とは、更に一層よく川中島の戦いにおいて発揮された。

川中島の戦い

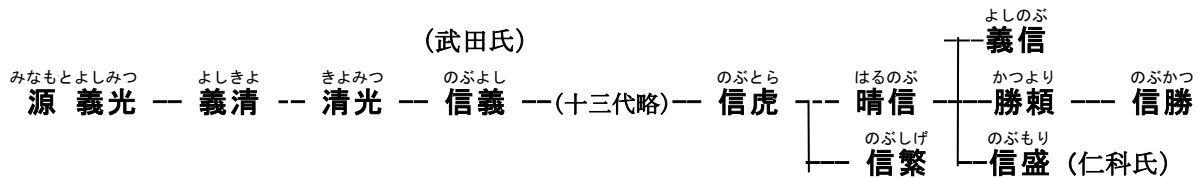
読者の皆さん、皆さんも多分、川中島の戦いのことは、すでにその大略を知っているでしょう。

しかし、ここでは順序として、先づこの戦いの相手であった武田信玄の生い立ちから、いかに彼が智謀にすぐれた英雄でしたかという事、又、どうしてこの戦



上杉謙信の筆跡

いが起こったのか、この戦いの有様はどんなだったか、この戦いのために、世に稀な英傑同士といわれたこの2人の武将が、何を得て、何を失ったかというようなことを順番にお話します。



武田信玄の生い立ち

武田氏は源義家の弟新羅三郎義光から出ている。代々甲斐(山梨県)にいた。義光の曾孫に当たる信義が巨摩郡の武田荘にいて、はじめて武田氏と称したのがその祖です。信玄は信義の15代の孫で、信虎の長子です。幼名を勝千代といいました。彼が幼少の時から、いかに聡明であったかという事については、さまざまの話が伝えられています。

雲雀の巢

8才の時に、家来共と共に春の野に出て、麦畑の中で、雲雀の巢を探したことがあった。勝千代は、家来共が1つも探し得ぬ間に、3つも4つも見つけたので、家来共が驚いて、不思議な事だと訊くと、彼はにっこり笑っていた。

「いったい鳥獣のたぐいは、至って賢いようだが、又、至って愚かなこともあるものです。空からおりる時は、人が自分の舞い下がるのを見て、その巢をさがして取りはしまいかと恐れ、わざと遠く隔ったところにおりて、そこから麦の中をくぐりめぐって自分の巢に帰るけれども、その子に餌をくれてしまうと、次の餌を早く取って来ようと思うから、心のせくままに巢の辺からすぐに起ちあがることもあろうかと、ふと心づいた。それで、雲雀の舞い下がる場所はかまわずに、舞いあがる場所に気をつけて、そこに行つてさがしてみると、果たしてその近辺に巢があった。ただそれだけの事です」

と。家来共はこれを聞いてみんな感心したという事です。しかし、勝千代はただその巢を見つけただけで、1つもこれを取ろうとはしなかった。家来共が、それをも不思議に思って訊くと、「折角、つくった巢を取

りこわすような、そんな無慈悲なことをするものではない」と言ったということです。

ふるだぬき かい
古狸の怪

又、こんな話もあります。— 12才の時に、ある秋の日の夕方、独りで縁側に立って、月が山の端に出て来るのを眺めていると、縁先においてあった木馬が、不意にぶるっと身振りして、声を出して、「いかに勝千代殿、剣術と兵法とは、どちらがすぐれていますか？」といった。勝千代は少しも驚かずに、「どちらも同じだ、優り劣りはない。それ、これが剣術のすぐれたところだ」というより早く、ぱっと木馬の前に飛びおりながら、佩びていた小太刀をひらりと抜き打ちに木馬の頭を斬った。たしかに手応えがあって、それきり更に音もしなかつたので、勝千代はそのまま誰にもいわずに寝てしまった。

ところが翌朝、掃除番の下部が、庭の小屋の中で1匹の古狸が頭を切られて死んでいるのを見つけたので、はじめて前夜の不思議は、そいつの仕業であったことがわかったということです。勿論、こういう話は、どこまで信じていいかわからないが、彼が幼い時から、まことに沈着であったということは、外にもさまざまな話で伝えられています。

さて、勝千代は16才で元服して、時の将軍足利義晴の1字を賜って名を武田晴信と改めた。それは天文5年のことでしたが、この年の暮れに、彼の有名な初陣の功名談があります。

ういじん こうみょう
初陣の功名

これより先き、父の信虎は、しきりに兵を諸方に出して武威を振るっていたが、この年の11月、またまた兵を信濃に出して海口城を攻めた。ところが、その城主の平賀源心は、大胆で武略もあって、身の力は70人に敵したという豪傑でしたので、信虎が8,000の兵を以って囲んだけれども、びくともせず固く守って、城は落ちそうにもなかつた。おりから、冬の真最中で、寒さは寒し、殊に12月の半ばからは、大雪さえ降り出して、幾日もつづいたので、その月の27日になると、もはやこれ以上の囲みは続けられなくなった。

そこで、空しく軍をかえすことになったが、この時、初めて従軍していた晴信は、自ら進み出て、殿りをしたいといって、僅かに300の兵と共に後に残った。そしてその夜、長い間の囲みが解けて、やれ一安心と敵が十分に油断しているところに窃かに取ってかえして、急に攻めて、城に火をかけ、3,000の城兵が右往左往に大混乱をきわめて、うろたえ騒ぐ中で、ついに源心を討ち取り、1夜のうちに全く城を落として、甲斐に凱旋した。

これには軍上手の重臣共も、全く舌を巻いて感心した。

ところが独り、父の信虎だけは敢えてこれを褒めようとしなかつた。却って何かと難癖をつけて晴信を貶めた。というのは、ふだんから次男の信繁を愛して、長男の晴信を疎んじ、機会もあれば彼の家督と廃そうと思っていたのに、思いもよらない功名を初陣に立てたからです。

しかし、晴信は、この無情な父の仕打ちに遭っても、少しも憤りもしなければ、勿論、功を誇ろうとしなかつた。彼はただ自分の作戦通りに城が落ちて、強敵をほろぼし得たので、それで満足していた。

とはいえ、この初陣の功名を立ててからは、部下の者の彼に対する態度が全く変わった。彼の威望は日に日に高まった。

父武田信虎に代わる

一方、信虎は、武勇にこそはすぐれていたが、ともすれば残酷な行いなどもあって、暴君に近い人物でしたので、心ある重臣どもは久しくこれを苦しめていたのです。それで、ここにおいてか、ついに相識して、信虎を体よく隠居させて、晴信を立てることにした。そしてその手段をいろいろと考えた末に、彼等は武田信虎の婿にあたる駿河の今川義元と謀って、信虎を駿河に抑留させた。天文7年3月のことです。

こうして晴信は父に代わって国を治めることとなると、今までよりもなお一層熱心に文武の道を修めて、ついに世にも稀な名将となったのですが、これに就いても1つの逸話が伝えられています。

氏神様のつかいを殺す

ある時、信濃に兵を出そうと軍評定をしていると、たまたま1羽の鳩が飛んで来て庭の樹にとまった。すると、家来共は喜んで、「これはめでたい。今度の戦いはきっと勝つ」と言った。「なぜ勝つのか？」と晴信が訊くと、「鳩は八幡様のおつかいで、八幡様は源氏の氏神様です。今、鳩が来たのは、八幡様が身方に勝利を得させて下さる前兆に相違ありません」と言った。

晴信はこれを聞くと、いきなり鉄砲を執って、その鳩を撃ち殺した。家来共は驚いて顔を見合わせていると、晴信は、「身方の氏神のおつかいを見て喜ぶような者は、敵の氏神のおつかいを見たら、戦う前から恐れて、気を挫くにちがいない。そんな心掛けで戦争は出来ない」といって戒めたというのです。

軍の門出に幸いさきを祝うということは、その頃の一般のならわしでもあったのに、晴信はそういう迷信じみた縁起をかつぐことを断固として排斥したのです。この一事を見ても、彼が尋常一様の武将ではなかったことがわかるではありませんか。

武田信玄の民治

天文20年2月、31才の時に彼は髪を剃って、機山信玄と号した。この頃はもう信濃の諏訪氏、小笠原氏、伊那氏、木曾氏などをしきりに破って南信濃一帯の地を略し、大いに武威を振るっていたが、又一方で、心を領内の政治に用いて、大いに人々の幸福をも図っていた。

毎年のように氾濫する水勢のはげしい流れを分けて、永く洪水の憂いを去った堤防工事などには、信玄自身が監督したというので、今もなお信玄堤の名が残っているくらいです。税を納める方法の如きも、人々に都合のいいように定めたが、貨幣の制度や枘の製法などの全く甲州独特のものが、後の世までも永く用いられていたという例もあります。



たけだ しんげん
武田信玄

第9話 上杉謙信と武田信玄

武田信玄の定めた国法の末文

信玄の定めた国法は、すべてで57条でしたが、その末文に、「晴信に間違ったことがあれば、貴賤を問わず訴え出よ」という意味がはっきりと書き添えてあるのを見ても、いかに彼が民の心を心として政治を執ったか、そしていかに身を以って常に範を示したかがわかります。

信玄の城

又、信玄の城は躑躅崎城といって、今の甲府市の北方約4km弱のところ（今の西山梨郡相川村古府中）に在った。今もその址は残っているが、東西約280m、南北約190mという小さいもので、僅かに狭い堀がその一部にめぐらされていた外には、これという程の防備も無かったらしい。周囲はすぐに田園に近づいているが、そこには諸将士の邸宅があったという。今も残っている礎石などから見ても、全くただの館でして、これがあの一世の英雄の拠った城郭だなどとは想像もできません。彼の和歌に、

人は城、人は石垣、人は濠
情は身方、仇は敵

というのがあります。実際に、彼が恃みにしたのは城ではなくて人であったのでしょう。のみならず、彼は退いて守るよりも進んで攻めることを常に考えていたようです。

甲州流の軍学

それで、戦術の上に、不断に新工夫を加えたのは勿論ですが、遠くに兵をやる必要から、更に味噌や草鞋のようなものに至るまで、それぞれに工夫を凝らして考案したという事です。信玄の戦術が永く後世に伝えられ、特に甲州流の軍学として軍学者に尊ばれたのも、決して偶然ではないのです。

村上義清を越後に追う

こうして、智謀の深い、戦術に長じた名将が、先づその領内をよく治めておいて、心置きなく隣国に兵を出したのですから、その向かうところに殆ど敵する者の無かったのは当然です。信玄はしきりに甲斐に近い信濃の諸城を陥れて、ついに進んで北信濃の村上義清に迫った。義清は、そのころ、更級、埴科、水内、高井の4郡を領して、きわめて勢力が強く、佐久、小縣の2郡もその配下に属していたのです。

村上氏と武田氏とは信虎の時代からしばしば相戦って、互いに勝敗を争っていたのですが、今度、信玄に攻め込まれてからは、村上義清は戦うごとに次第にその勢いを失った。ついに天文22年の8月、両軍は大いに上田原に戦ったが、この時、義清は本城の葛尾城へ帰る路を敵に断ち切られてしまったために、よんどころなく遠く越後に奔って、上杉謙信に援けを求めました。上杉憲政が謙信を頼って行った翌年の事です。

すると謙信は、例の強い義侠心から快くその頼みを引き受けた。それで、川中島の戦いが起こることになったのであります。

川中島の地

そもそも川中島というのは、千曲川と犀川との合流する地方の総称でして、今の長野市からは南方、松代町からは北方に当たっているところです。更級郡の東北部に属しているが、又、更級、埴科、水内、高井の4郡に跨っている平野の中心に位してもいるところから、川中島4郡の地の称もある。村上氏は、前にもいった通り、この四郡の領主でしたのですから、この川中島を失っては、彼の立場がなかったのです。

川中島の第一回会戦

さて、謙信は、村上義清の頼みを受けると、兵を信濃に進めて、川中島を奪い返そうとしたが、一旦奪った信玄がそう易々と之を手放す筈がない。時は後奈良天皇の弘治元年7月、謙信は軍を率いて善光寺に陣して、信玄は川中島の大塚に陣した。謙信は26才、信玄は35歳です。一方が旺盛な元気で、多少は無理でも一気に押し通そうとするのに対して、他方はじっくりと落ち着いて、理にかなった戦法を以ってこれを迎えようとしている。戦国時代の英雄の中でも殊に名高い両雄の戦いです。信玄といえば謙信、謙信といえば信玄と、今の世にまで歌われている両雄の戦いです。どういう風に戦いは展開して行ったでしょうか？

多分、いづれにも乗ずる隙が無かったのでしょう。両軍ともに対戦したまま容易に開戦しなかったのです。互いに大事を取って、敵の動きを待っていた。けれども血気盛んな謙信に取っては、これをいつまでも我慢してはいられない事でした。

元気盛んな謙信と智謀に富んだ信玄

とうとうしびれをきらして、謙信はある日、使いを信玄の陣にやって言させた。「聞くところによれば、貴公の向かうところには1人として敵する者が無いというではないか？なぜ謙信に対してのみ決戦をしないのか？元来、自分は貴公に対して恩もなければ怨みもない。ただ村上義清のために出て来ただけである。いったい何だつて貴公は彼の領地を奪ったのか？もし貴公が自分と戦いたくないなら、直ぐに領地を彼にお返しなさい。もしまた領地を返したくないなら、すぐに自分と戦いなさい」と。

信玄は答えていった。「貴公が義清を庇われるのは、まことに見あげた行いである。けれども、信玄が生きている間は、貴公の望みは達せられまい。もし貴公が戦いたくば、いつなり貴公からお始めなさい」と。

そこで謙信は、部下の諸将と相談してから、「よろしい。では明朝開戦しましょう」と言い送って、その夜、準備を整え、約束通りに夜明けから戦いを始めた。けれども、互いに劣らぬ名将同士のことですから、その戦術が自在をきわめて、ついにその年の10月になっても勝負がつかなかった。それで、両将は後日を約して互いに軍を班しました。

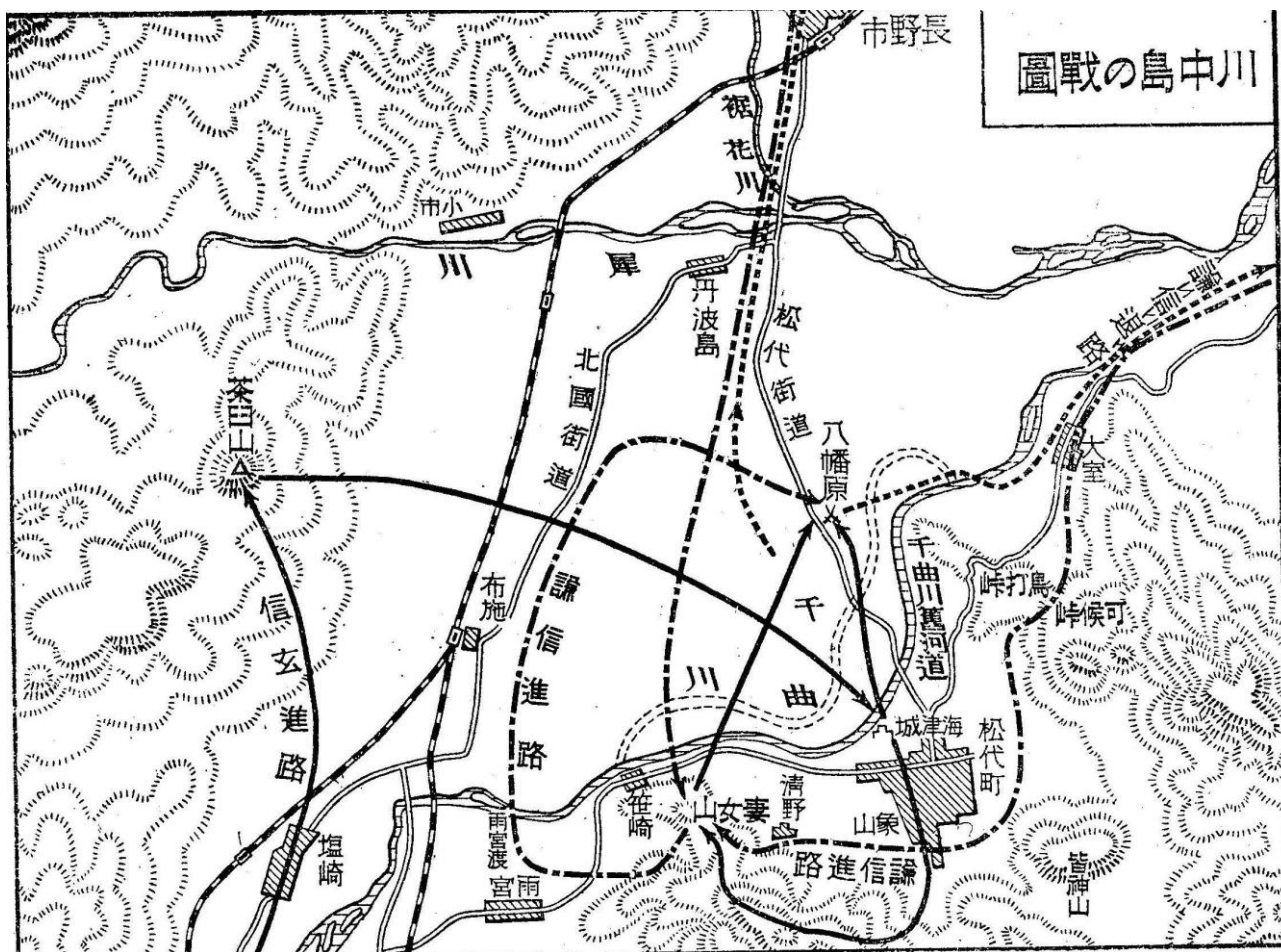
けれども、事が落ち着いたわけではないのですから、その後もたびたび兵を出して、両軍は戦ったが、いつも勝負はつかなかった。

最後の川中島の戦い

こうして、第1回の会戦から6年の後、時は第106代正親町天皇の永禄4年8月、甲越の両軍はまたもやここに会戦した。最後の川中島の戦いで、激戦として最も有名なのがこれです。

この時謙信は、今度こそはどうでも勝負をつけてしまおうと固く心を決して、精兵13,000を率いて信濃に進み、西條山（訳注：または妻女山）にのぼると、かねて信玄が守備兵を置いている海津（今のまつしろ）の城を見下ろすようにして陣を取った。

信玄はこれを聞くと、すぐに20,000の兵を率いて出向かい、先づ本陣を茶白山に置くと、すぐに一隊を放って、雨の宮の渡りを取りきり、越後への敵軍の通路を絶って兵糧運送の便を失くさせた。越軍の将士はこれを知ると大いに心配して騒いだが、独り大将の謙信は少しも驚いた様子もなかった。彼はすでに背水の陣を布いて、決死の臍を固めていたのであります。



武田信玄の戦略

こうして幾日か対陣したが、そのうちに、信玄は兵を海津の城に纏めて、更にこれを2つに分けると、1軍を以って堂々と西條山（妻女山）に攻めかからせて、謙信が勝っても負けても千曲川を渡って犀川のほうに引き取るところを、信玄自身は別の1軍を以って川中島に彼を要撃しようという案を立てた。20,000の大軍を以って、敵の13,000を前後からおしついで撃って、一気に打ち破ろうとしたのです。

上杉謙信の戦略

信玄はこの決戦を9月10日と決めて、9日の夜半から兵を動かさしはじめて、10日に雌雄を決するつもりで準備をしていた。ところが、謙信は早くもこれを探知した。彼は信玄の謀の裏をかいて、9日

第9話 上杉謙信と武田信玄

やはん ぜんぐん ひそ しゆくしゆく ちくまがわ わた かわなかじま おもむ てき
の夜半にならぬ前に、全軍をまとめて密かに山をくだると、肅々と千曲川を渡って川中島に赴いた。敵
ほんぐん さいじょうざん むか あいだ ゆだん しんげん はたもと ふい おそ われ いっき う やぶ
の本軍が西條山に向っている間に、油断している信玄の旗本を不意に襲って、我こそ一気に彼を打ち破ろ
うとしたのです。

しんげん まった よていどお じん と むか ほんぐん
信玄は全くこれを知りませんでした。彼は予定通りに、川中島に陣を取って、西條山に向った本軍の
きつそう ころ あき すえ あさぎり ふか さつ あさかぜ
吉左右いかにと待っていた。頃しも秋の末のことで、朝霧が深く立ちこめていたが、五時ごろ、颯と朝風
ふ きり は なんぼう あた うえすぎぜい せいき ひるがえ せいぜん
が吹いて、見る見る霧が晴れていくと、はるかに南方に当って、13,000の上杉勢が旌旗を翻して整然と
ひか
控えています。

「や、どうしたのだ、これは？」 武田の諸勢もこれには仰天した。

「いつの間に、かかる大軍がここへは押し寄せたのだ？ 天から降ったか、地から湧いたか？ まことに
てんま しょぎょう いちどう あき きょうふ いろ ぼうぜん う なが
天魔の所行である」と。一同はただ呆れて、恐怖の色さえ見せて、呆然と打ち眺めていた。さすが
しんげん けんしん はやわざ おどろ もの どう とち ようす あか
の信玄も、この謙信の早業には驚いたが、もとより物に動ぜぬ名将のことで、すぐに土地の様子に明
ゆうし けんしん そな ていさつ
るい勇士をやって、謙信の備えを偵察させた。

上杉謙信の車懸りの陣法

けんしん くるまかかり じんぼう
勇士は馬に鞭打って、駆け出して行って、よくよく上杉の陣を見すまして、やがて帰って来ると、謙信は
すでに軍を引き取られましたと言った。しんげん ふしん おも けんしん よい こ ま
信玄は不審に思って、「謙信ほどの者が、宵から川を越して夜を待
あ なん いっせん およ ひ と
ち明かしながら、何で一戦にも及ばずしてむなしく引き取るものか。その引取り方はどんなであった？」
き みかた そな た き いくど そな く か
と訊くと、身方の備えをめぐって、立て切り、立て切り、幾度かこういう風に、くるりくるりと備えを繰り替
えしながら、さいかわ ほう い
えしながら、犀川の方に行かれましたという。

武田信玄の待身方の備

けんしん まちみかた そなえ
「それは車懸りの陣法だ！」と、しんげん おお おどろ ひっし とつげき
信玄は大いに驚き、「それだと、間もなく、敵は必死となって突撃
く そな た なお いそ めいれい つた まちみかたぞなえ
して来るにちがいない。こちらも備えを立て直さなければならぬ」として、急いで命令を伝えて、待身方備
じんぼう か きゅう みかた き くづ たい じかん の みかた
という陣法に変えた。敵が急に身方を切り崩そうとするのに対して、出来るだけ時間を延ばして、身方の
ほんぐん か じんぼう たいぐん も きょうげき
本軍が駆けつけて来るのを待とうという陣法です。20,000の大軍を以って敵の13,000を挟撃しよう
こぜい おそ
としていたのに、あべこべに、こちらの小勢がその13,000のために急に襲われようというのですから、武田勢
むり
が驚いたのも無理がないのです。

大接戦

こうして、武田方があわてて備えを12段に変えて、敵の猛勢を防ぐために、先を箕手(訳注:左右に出
ば ふじん かま は しんげん くるまがか
っ張った布陣)に構えたと思う間もなく、果たして、信玄が言ったように、上杉方の車懸りがめぐって来て、
けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん けんしん
武田方の備えと行き逢った。忽ち大接戦が始まった。両軍は入り乱れ、関をあげて、槍襖をつく
って攻め戦った。午前6時ごろから始まって、8時ごろまで2時間、烈しいとも、凄まじいとも、いい
ようのない戦いがつづいて、武田方の12段の備えが9段まで打ち破られたというので、いかに大激戦であ
ったかが、そうぞう
想像されます。

あの名高い謙信と信玄の一騎打ちは、この時の事として伝えられています。

名高い一騎打ち

初め謙信は、今日こそは必ず雌雄を決しようと心に期していたのですが、武田方の備えが九段まで敗れて、かねて自分の思った通りに、信玄の旗本が次第に薄くなったのを見ると、今こそ機会だと、着ていた金の冑の緒を切って、傍らの深みへ打ち込み、白練の絹を以って頭をつつみ、放生月毛の愛馬に1鞭当てて、只1騎、3尺6寸の太刀を抜きかざして、まっしぐらに信玄の床机備えにと乗りつけた。見ると、信玄は悠然と床机に腰をかけて指揮をしている。謙信は、さっと烈風のように、乗り寄せると、いきなり名乗りもあげずに3太刀をまで斬りつけた。

信玄は持っていた軍配団扇で防いでいたが、忽ち其の柄も切り折られて、肩先に太刀が当って、すでに命も危うくなった。

ちょうどこの時、家来の原大隈が槍をのぼして謙信を突いたが当らなかったので、返す槍でその馬を打った。馬は跳ね上がって駆け出した。そこで、信玄は危ういところを助かった。実に間一髪のところでした。

この時のことを詠じた頼山陽の有名な詩があります。

鞭聲 肅々 夜過 河
 暁 見 千 兵 擁 大 牙
 遺 恨 十 年 磨 一 劍
 流 星 光 底 逸 長 蛇

というので、勿論、謙信の心持を歌ったのであります。



長野 川中島 謙信と信玄の川中島の一騎打ち

こうして謙信は猛威を振るい、武田方の名のある大将を大勢討ち取ったりして、いよいよ勝ち誇って、大いに気をよくしていたのです。

形勢の一変

第9話 上杉謙信と武田信玄

しかし間もなく、西條山に向った武田方の諸将が、謙信に出し抜かれたのに気づいて大いに憤りながら盛んに関の聲のしている川中島へ一散に取って返してからは、忽ち形勢が一変して、上杉方の苦戦となった。信玄の旗本が盛り返して、新手の諸勢と上杉方を挟撃することになったからです。

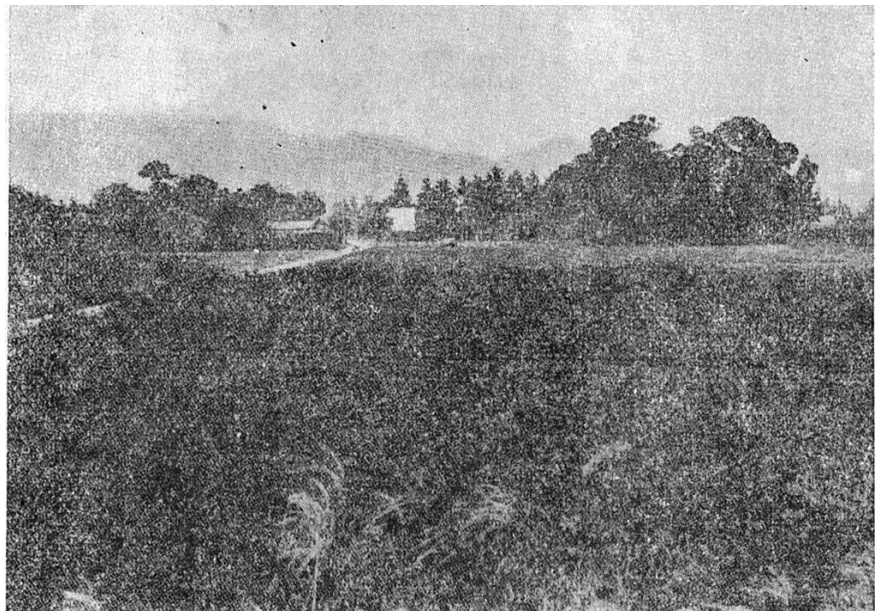
一騎打ちが朝の8時ごろでしたのに、この大激戦が完全に終わったのは、午後の4時すぎであったというので、早朝に合戦の始まった時からいけば、凡そ10時間にわたって、両軍ともに火水となって戦ったのです。実に古今未曾有の烈戦であったと伝えられるのも不思議ではありません。

無勝負

この1日に討ち死にした者が、武田方では信玄の弟の信繁を始めとして、2,300余人、上杉方では3,500余人の多きに達したといえます。

しかも戦いは、前と後とで、互いに1勝1敗でしたので、どちらが勝って、どちらが負けたとも言えないという事になっています。

けれども、この1戦によって、謙信も信玄も、共に2人が相争うことの愚なのを悟ったのでしょう、これきり2人は2度とまた共に戦いませんでした。



川中島の八幡原

更級郡（現長野市）小島田町に在る。

有名な一騎打ちは北八幡原であったと伝えられている。

さて、川中島の戦いが無勝負に終わって、謙信が信濃に兵を出さなくなると、村上義清の元の領地はそのまま完全に武田氏の手へ帰した。今は信濃1国が、ことごとく信玄の領分となってしまうのです。そこで、信玄は転じて兵を他の方面に向けました。

武田信玄の西上計画

もともと謙信も、信玄も、折を見て京都に上り、将軍を奉じて天下に号令しようとしていたのですが、川中島の戦いのために互いに相妨げられて、兩人ともに久しく、その志を遂げようとする事すら出来ずにいたのです。それで、武田信玄は、今度、信濃から兵を引くことが出来るようになると、先づ東海道筋を征服して、京都に上ろうと考えて、第1に駿河の今川氏真を狙った。氏真は義元の子で、信玄には（姉の産んだ子ですので）甥に当るのですが、生まれつき暗愚で、武田家のためには不利益な陰謀に荷担したり、又、彼の妻の祖父の北條氏康と謀って、武田氏を苦しめんがために、信玄の領国へは一切塩をおくらせない事などがあったために、信玄は大いにこれを憎みました。

上杉謙信の義侠

この塩の事に就いても有名な上杉謙信の義侠の話があります。

一体、武田氏の領国は、甲斐は勿論、信濃も、上野もみな海に面していないので、塩を止められると、非常に困った。軍兵も、人々も、頓に元気が無くなって、この上もなく難渋した。さすがの信玄もこれには全く当惑した。謙信ははるかにこの事を越後で聞いて、早速手紙を信玄に送って言った。

「聞けば、氏真や氏康らが貴公を苦しめるのに塩を差し止めたという事だが、なんという卑劣な振る舞いだろう！なるほど彼等のような腰抜け大将共は弓矢を執っては貴公に敵することは出来ないから、そういう未練な計略で貴公を苦しめて、腹を癒そうとするのであろう。まことに笑うに堪えない話である。謙信においては、戦場でこそ戦おうと思えども、塩などは、いくらでも謙信の領分から送らせましょう。入用なだけお取りなさい。万一、商人どもが値段を高くするようでしたら、その旨を言ってくだされば、乾度申しつけます」と。

信玄を始め武田の諸将士も、この厚意には非常に感激して、早速、信玄も自筆で返事を認めて、厚く礼を述べたので、それからは、越後から塩がどしどし送り込まれて来たという事です、実に謙信の義侠は、その武勇よりもはるかに優って尊いものがあります。

三方原の戦

さて、信玄は、永禄11年12月に、兵を率いて駿河に入り、苦もなく氏真を破って、これを奔らせると、東は伊豆に西は遠江にと兵を進めて、ますますその勢力をひろめていたが、ついに元龜3年10月3日、25,000の兵を率いて、いよいよ西上の途についた。信濃の伊那から、遠江の秋葉路を通して、二俣城を陥れ、天竜川を渡って、三方原に出た。三方原は浜松の北方約10kmのところのところに在って、東北から西南にわたった高原です。そのころ、遠江と三河は徳川家康の領地でしたので、家康は本拠を浜松に置いてこれを拒ぎ止めようとした。しかし自分独りでは、逆も信玄に敵することが出来そうになかったので、前から同盟していた岐阜の織田信長に急使を馳せて援けを乞うた。信長はすぐに佐久間信盛、滝川一益らに3,000人を率いて援けさせた。そこで、家康は、10,000余の兵を率いて三方原に出陣し、元龜3年12月22日、ここに武田氏と徳川氏の大衝突が起こったのです。

徳川家康の敗軍

しかし、この時31才の家康は当時、海道第一の弓取りとは称されていたけれども、まだまだ老巧な52才の信玄の敵ではなかった。織田氏の援軍が先づ破れて、ついで家康の軍もまた潰えた。それで、家康は、その日の夕方、辛くも逃れて浜松城に入ったが、わざと城門を閉ざさずに、門内に篝火を焚かしておいた。遅れて帰って来る者のために、そうしておいたのですが、追撃して来た甲州軍の先鋒は、これを見ると、何か計略でもあるかと思ひ違えて、城内には攻め入らずにそのまま兵をかえした。彼等は知恵負けしたのです。

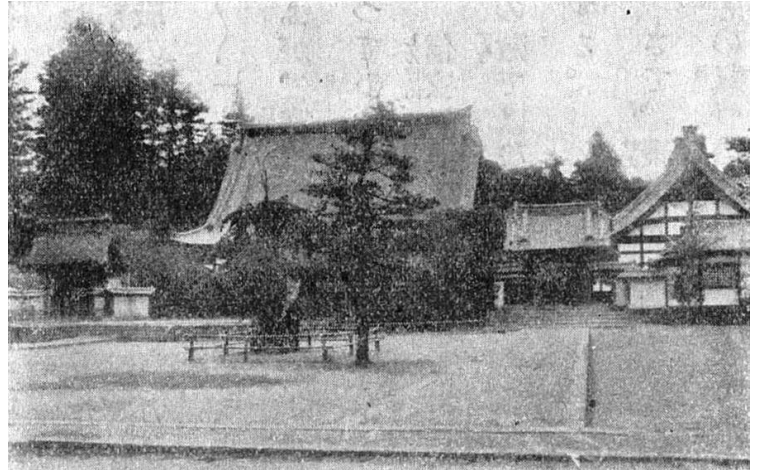
とはいえ、信玄の西上は少しも妨げられはしなかった。彼は浜松城の家康をば、そのままにしてお

いて兵を西に進めた。そして、翌天正元年の正月には、三河の野田城を攻めてこれを落としました。

武田信玄の病死

ところが、何という不運なことでしたでしょう！ この時、武田信玄はたまたま病気にかかったので、よんどころなく軍を甲斐に班す途中、信濃の駒場で遂に亡くなりました。天正元年4月12日のことで、年は53才でした。但し、彼の遺言があったので、その死はこれを秘してその後3年の間は、なお病中ということにしておいた。敵とした人々から、その死に乗じて、にわかに領国を襲われないがためです。

それで、諸方に手紙を出すにも、彼がかねて用意して花押を書きおいた紙に書いたもので、その病死は容易に世間に知れなかったという事があります。その墓は、今の中央線の塩山駅の西北1km強の恵林寺に在ります。なお、大正4年11月10日、大正天皇は特に信玄に従三位を贈られた。



山梨 塩山市 恵林寺

向って左方の奥に信玄の墓がある。

なお、ついでにお話ししておきたいのは、後に、信玄の病死が世間に伝わった時の事です。

これまで彼を敵としていた諸将士は皆これを聞いて大いに喜んだが、独り越後の上杉謙信だけは、ちょうど食事中にこれを聞くと、思わず箸を落として、「ああ、亡くなったか！ 惜しいことをした。まことに信玄こそは、古今に稀な名将であったのに」、合戦の好い相手を失って、力を落とした。「もう信玄ほどの英雄は再び世に生まれ、さてもさても」とばかりに、涙をはらはらと落としたということです。英雄よく英雄を知ると言うが、実に謙信と信玄とは、互いに敵同士でありながら、しかも心中は互いに相許し合っていたようにも思われます。

信玄の後には子の勝頼が嗣いだ、武田氏はこれより次第に振るわなくなり、もはや謙信の敵ではなくなりました。しかし、その詳しいことは、後の織田信長の事蹟を述べる時にお話します。

上杉謙信も西上を図る

さて、上杉謙信もまた折を見て、京都に上ろうと思っていたが、今や信玄が死んで、あとの気づかいが全く無くなると、彼は道を北陸道に取って、西上を図った。天正4年には先づ越中を平らげ、翌5年の9月には、能登に入って、そのころ最も勢力が強く、頑固に抵抗していた七尾城を陥れた。この攻撃中の事として伝えられているが、たまたま十三夜の明月に出会ったので、彼は陣中に諸将を集めて、宴を開き、その席上で、自ら詩を吟じた。

しも みちて ぐんえいに しゅうきよし
霜 満 - 軍 営 - 秋 気 清
えつざんあわせ えたりうしゅうのけい
越山 併 得 能 州 景

すうこうのか がんつきさんこう
数 行 過 雁 月 三 更
さもあらばあれ かきょうおもう えんせいを
遮 莫 家 郷 憶 - 遠 征 -

第9話 上杉謙信と武田信玄

いかに得意であったかが想像されます。

上杉謙信の病死

ところで、そのころ、近畿のほうでは、織田信長が頗る勢いが盛んでして、すでに近江の安土に城を築いて天下を平定しようとしていた。謙信が日頃抱いている西上の志を遂げるためには、先づこれを破らなければならない。そこで謙信は陣中から信長に使いを立てて言った。「貴公は近畿のほうで大ぶ威勢を張っているようだが、未だ北陸武士の腕前を見られたことはあるまい。明年3月中旬には、謙信が必ず越後を出て京都にのぼって行くから、その時には、貴公も安土を出て、快く一戦をなさい」と。

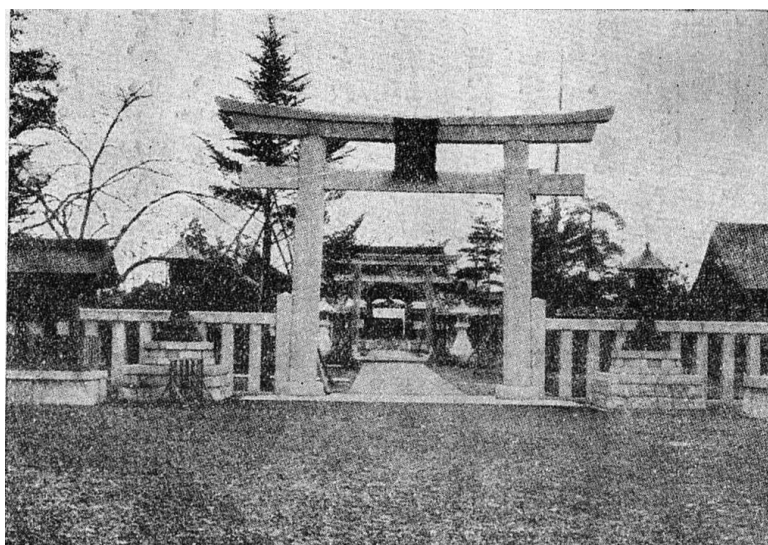
そしてこの時は一先づ越後に引き上げたが、翌六年の春、大兵を春日山城に集めて、いよいよ3月15日に、約束通り、出発することにした。ところが、その2日前の13日に、上杉謙信は俄かに卒中に罹って亡くなりました。年は49才でした。さぞ残念であったでしょう！

運の好い信長

それにしても、信長は運の好い人でした。彼の兵はそのころ、確かに多いには多かったが、まだまだ謙信の兵のように精錬されていなかったのので、この両雄の決戦が、もし本当に行われたならば、果たしてどちらの勝利となったか、疑問でした。しかるに、さきには強敵の信玄が途中で俄かに病死し、今また謙信がも病に斃れて、恐るべき敵がなくなったのです。

謙信には実子が無かったので、養子の景勝（長尾政景の子で、その母は謙信の姉です）が家を継いだが、上杉氏もこの後は進取の勢いを失いました。景勝は後に秀吉に仕えて会津に封ぜられ、後また家康のために米沢に移されました。

今、米沢市にある別格官幣社上杉神社は、即ち、謙信を祀った社で、朝廷は特に従二位を彼に贈られた。



米沢市 上杉神社

今（戦前の）の上杉伯爵家はその子孫であります。

（第9話 上杉謙信と武田信玄 終わり。 次は前頁に戻り、第10話 毛利氏の興起 〜）